

文久元年辛酉夏帰藩後日割

①

文久元年辛酉夏帰藩後日割

六月十五日 壬申曇後雨

起出て拜畢。久しく見ざりし間に、近隣も岸の老父死去し、西田文太衛門引越、其跡へ小山皆右衛門うつりぬ。

庭前は草ども弥ましに茂りて、茅茨きらすをえし、堯舜の代のさま。又原憲が家にも似たり。いと物ぐさし

髪月代して津田に至る。からし吉持参。午後憲明来る。其後仮寝す。井狩貢・高恒半助来る。

夜徳源寺に至る。さくらづけ持参。和尚并大蔵寺隠居も仏参御免に相来候よし。

一同と會し、四つ過まで物語してかへる。

朝食 午飯 焼貝 夕食 しじみ汁・さけ

六月十六日 癸酉 雨 巳碑 後晴

追々つかれ出てねむし。

②

朝大蔵寺に至りて皆語談し、午後は花壇、庭の草を刈。夕方畢る。

柴田はく来る。

夜また龍源寺へ遊ぶ。大蔵寺、越中や政にてさけ。政二郎、予にとて酒肴持参。四つ過に至りて帰る。

③

朝食つみいれ汁、午飯とうふ、夕食おなじ。

六月十七日 甲戌 晴 進當番

今日より案を出し、筆硯につく。季蔵手本したしむ。

写し物二葉かり、張かく。宮崎平蔵・河合勇来る。勇に今泉への状たのむ。

大蔵寺に遊ぶ。午後仮寝。高垣・井狩来る。

夕方より庭前に水を撒く。

朝食 牛蒡汁、午飯 茄子漬、茄子後、夕食松魚ふし

夕方より井狩へ招かれゆく。酒肴出づ。五つ過まで酌てかへる。牛蒡、泥鰌、奴とうふ。

④

六月十八日 乙亥 晴

朝、人見甚兵衛来る。夕、仁右衛門来る。

季蔵、小弥太手習。

午後仮寝す。

夕、高垣に遊ぶ。早く臥す。

朝食 午飯、八はいとうふ、夕食同。

大黒屋中二郎、桃持参

⑤ 六月十九日 丙子 晴冷如秋氣
小弥太、鉄三郎手習。○髪月代

夕、青山又蔵来る。同道にて中屋に遊ぶ。途(中)金比羅御供所に立寄、篤雲に逢ふ。中屋にて夜に入まで酌。塩引奴とうぶ、さけ、三百文。夫より岡村に遊。同人不快。越智新右衛門、土屋仁右衛門會す。

○六月二十日 丁丑 晴

朝、新勇太郎、高垣半助、篤雲、宮崎平蔵来る。
午後、大蔵寺に遊ぶ。津坂東作来る。

⑥ 夕、龍源寺に遊ぶ。夫より津田に遊ぶ。
朝食茶づけ、午後同、夕食同。

(一部省略)

⑨ 六月廿一日 戊寅

(朝拝後、運平方へ至り、暫く語談し、夫より忠治宅、龍源寺へゆく。夫より髪結に至り、月代なす。憲明同道にて同人部やに至る。温(鹽)鈍馳走になる。)

今日、江戸への状、岡実・浅井・糸賀等認、麦こがし式袋、糸賀・浅井へ送る。
夕方は東作同道にて行田に遊ぶ。途、笹岡善三郎 三月初 飯宅へ立寄、大黒 国はね

屋に至る。早速さけ出し あげもの 爰にて大分酔、夫より丸やへ状たのみ、長徳寺に行しに、和尚、又直しにしめもの出す。予酔中、殊に直しをたしまざれば、早々に辞しけるに、東作のすゝめにて大利の楼に登る 玉子やき・茶碗盛・うなぎ・なす甘煮、八百文 大に酔てかへる。
そのさま図の(こうじ)。

六月廿二日 己卯 晴

大蔵寺にあそぶ。午後仮寝す。

夕、龍源寺より岡村・土屋に遊ぶ。九つ前かへる。

(土屋の図)

⑩ 仁右衛門 襄山(石城) 莊七郎 勇太郎

六月廿三日 庚辰

六月廿四日 辛巳

金鴉白鶴着色はじめ

半襟 加藤記

外に扇子き本したゝむ。

午後津田へまねかれ湯飯のもてなしにあづかる。

石城日記著者の経歴及
其作品

石城日記著者経歴
尾崎隼之助

名貞幹。始め鈴之助と称し、庄内藩土浅井勝右衛の子なり。松平下総守の臣尾崎隼之助勝義の養嗣子となりて隼之助と改む。性磊落不羈。安政四年、上書して藩政を論じ、為めに執政の忌む所となり、御馬廻役を免ぜられ蟄居を命ぜられ、且つ食録百石を没収され、僅かに十人扶持を給せらる。明治維新の際、岸嘉右衛門等と共に、藩の為に努力し、内外に亘って幹旋甚だ力めしを以て執政も亦其才幹を認め、藩学培根堂教頭に起用せり。後に宮城縣大主典となり、大いに認められ、明治七八年の頃、任地に在て病没せり。性、讀書を好んで講學は字句の末に拘泥せず、直ちに意義の本■に突いて心に傳ふるを主とした。石城と號して、最も酒を嗜み、興熟すれば、五六樽を倒すのを常とし、其故に他家へ招かれて行く時は先ず自宅にて二三樽を傾けて後に出掛けしと云ふ。斯くせずば、徹宵終に酔ふ事能はず、主人並びに座客に對して、感興を殺ぐを恐れると。

昭和二年十月刊 石島薇山著「忍の行田」より
(以下略)